

発掘調査の概要

藤原京右京二条一坊・醍醐環濠集落の調査

(飛鳥藤原第192-4～6次)

2017年6月5日から7月11日まで、橿原市醍醐町で宅地開発にともなう発掘調査をおこないました。調査地は、藤原京右京二条一坊に位置し、敷地の西端では西一坊大路東側溝の存在が予想されました。また、中・近世の醍醐環濠集落の西北部にもあたります。そこで、敷地内に6ヵ所の調査区を設定しました。

西一坊大路東側溝は、中世の集落をめぐる幅7m以上の環濠によって削平されていたため、残っていませんでした。今回の調査で検出した古代以前にさかのぼる遺構は、古墳時代の斜行溝1条のみです。

いっぽうで、調査区各所で中世以降の醍醐環濠集落に関わる遺構を確認しました。集落北辺付近では、東西方向の幅5mの環濠を検出し、集落の西北角に沿って、環濠が西側で南に折れていく状況がはっきりになりました。その南延長上には、先に説明した集落西側の環濠があり、その関係が注目されます。

これらの環濠の内側でも、幅3mの東西大溝と幅1.5m以上の南北大溝を確認しました。これらは埋土の様子が類似しているため、一連の遺構とすれば、複数の環濠がめぐっていた可能性も考えられます。このほか、中世から近世の掘立柱建物や井戸を調査しました。遺物では、漆器椀、曲物、鹿の骨、桃核等がみつかりました。

今回の調査では、中世から近世にいたる醍醐環濠集落の実態を示す、重要な成果があげられました。現在までつづく醍醐集落の歴史があきらかになる日も近いかもしれません。

(都城発掘調査部 張祐榮)



調査区全景(北西から)